

時の歩みによせて

高橋さやか

春、また新学期がはじまる、新年度が明けた、と見たのは、つい昨日か一昨日、という気がするのに、梅雨——日本の雨季に入り、すぐに夏となり、また秋となり、冬が来る。冬に入ればまた一つ年が重なり、次の年度が明けるのもまたたく間である。

何をしたのだろう、何をするひまもなかった、と思となは思う、……恐らく、そう思うおとなは少くはないといえるのではないだろうか。

しかし、子どもは、すべての子どもが確実に一年たてば一年分の成長を遂げている。よくか、悪くか、プラスの方向にかマイナスの方向にか、いずれにしろ、子どもは一人一人それぞれに「自分」を築き人格上の実績をつみ重ねる（重ねた）のである。

おとなになつてからの時の歩みは、一人一人のおと

なにとつて停滞することも珍らしくないし、なかったに等しい場合だってあり得るようである。しかし、子どもにとっては一刻一刻、常に常にかが加わり、変化し、彫り込まれ、型づけられるのである。子ども——成長期の人間にとつて、不断に移る時は決して無になることはない。必ず、よくか悪くか、正常か異常か、健康か病弱か、順調か障害を負うか、……等々の実績を組み成しつづけるのである。ある意味で、社会そのものの実態も、子どもと同様である。社会の様相は、やはり不断に時と共に移り動いており、状況は、昨日と今日とではもう同じではない。

とすれば、おとなになつてしまった人間は時代（社会）からも子どもからもとりのこされる、とみとめざるを得ない。いや、おとなとても状況——時代・社会

に属さざるを得ない存在なのだから、状況によって始
終変りつづけているに違ひはないのだが、様々のもの
ごとについて意識的な生活をしているにもかかわら
ず、自分をも包括している状況の移り変りを意識に捉
えることができないでいるわけで、結局、時代にも子
どもにもついてゆけない結果を招いてしまう。自分と
自分のおかれている状況について、自覚のもてないお
となほどなさけないものはない。

子どもが成長の段階を一つ一つ、不断の学習と、学
習の総括としての遊びと、それらによって獲得した実
力に応じて成果をあげるしごと（仕事）と、この三者
を綜合して自ら充足し達成してゆくのに、おとなはそ
れにまともにかかわろうとはしていないのではない
か。子どもが成長の段階をふみ上る途中で、挫折した
り歪曲されたり破綻を来したりするのは、やはり、無
為無力なおとなのせいである。子どもにも時代・社会
にもついてゆけず、そういう自分に対する自覚も自省
もないおとなのせいである。

このごろの、教育にかかわる権威ありげな諸方面の
コメントは、恐しくもまたしらじらしい。ことに、道
徳の昂揚とか、権威の尊重、鍛錬主義の正当性・効用
など、ことごとしく評価されるのは恐しい。

本当に大切なのは、人間が人間らしく、よいかかわ
りを求めつづけ、それをもつことに努力しつづけるこ
とにほかならない。

移り動く時の歩みにそのまま即して成長している子
どもにかかわるなら、子どもとともに時の歩みに即し
て歩まなければならぬ。その時その時に、子どもが
何を感じ何をうけとめ何を学び何を通過させたか、う
ちに残したものは何か、なお求めているものは何か。
失ったものは何か。……それを共に感じうけとめ学び
通過させ、残しかつ求め、そして失ったものをも認め
ている、そのように子どもにかかわっているなら、私
たちは子どもとともに確かに時を所有し時を重ねるこ
とを得る——そのようにしてはじめて私たちは、教育
に与ったといえるのである。

（西南女学院）